
ひも

ムテキング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひも

【Nコード】

N9031H

【作者名】

ムテキング

【あらすじ】

これは男の心情を描いた物語である。

第一話 螺旋

「今日も暇だなあ」

男の名前は泉 佑樹。

「明日も暇だなあ、明後日も暇だなあ」

とりあえず、泉はいつものとおりパチンコが回転するまで、近くのコンビニで

立ち読みをしていた。

「よっしゃ、今日は勝てるような気がする」

泉は気合を入れてパチスロの三ダム3のダムの巡り合いをうっていた。

だが、ダムソードに発展したが、間違っベルの順番を押し間違、ARTから降下してしまった。

「あー、くそ。プレミアムダム引いたっていうのによ。くそ」

男は金がなくなり、パチンコ屋を出た。

「いったん、帰るか」

泉はマンシヨンに歩いて帰った。

マンシヨンにつくなり、105の川崎の表札の部屋に入った。

「弥生帰ったぞ」

実は、その男はひもであった。

「はやくない、まだ11時よ」

「うるせーな、金がなくなっただよ」

「えー、だって昨日の夜に一万円あげたでしょう」

「だってよ、おまえが出かけて来いっていうからよ。行く気はなかったんだよ。ちょっと

トイレだけ借りようと思ってパチンコ屋にいったらよ、新台が入っ

ていてよ。

やっぱ、あれかなと思って、トイレだけ借りたら悪いから、千円だけ打ってやろうと思っ
たら、

いつのまにか、なくなっていたんだよ。まるで手品のように」

泉は上手いことまとめたなと思っていた。

「ばかじゃない。いつもんぐうたら寝てばっかしの生活じゃないの、少しは掃除くらいしたらどうなのよ。私が働いている間」

女は日ごろのストレスがたまっているうえにあの日であった。

「ちっ、うるせえな。そんなこといいから、幸子飯作ってくれよ。
俺、腹へってさ」

「うるさいわね、今から部屋掃除するのよ、ほら千円あげるから夜まで帰ってこないでよね」

幸子は千円を泉に渡した。

「・・・わかったよ」

泉は不満そうにマンションを出た。

「あーくそ、幸子の奴、ぜってえ、あの日だな。ちい、女って奴はよ。めんどくせえな」

泉はとりあえず、腹を満たすため、牛丼を食べに行った。

「あー、食った食った」

そして、いつもの公園のベンチでビールを飲んでいた。

「あー、昼まっからのビールはうめえなあ」

泉はゆったりしていた。

「あれから、もう二年かあ」

実は幸子と出会ってから、二年の月日がたっていた。

相も変わらず、俺は今で言うニートであった。

たまに、バイトをしながら、自由気ままな暮らしをしていたが、次第に

家賃が払えなくなり、住んでいたアパートを追い出された。

そこで、寝床を確保するため、公園のベンチを死守していた。

そこで、公園の生活も2、3日過ぎようとしていた。

「はぁーやべ、まじで金がねえ。昨日、パン代であと17円しかねえ」

泉は上半身裸で17円を握りしめていた。

「しかし、この公園全く人がこねえな、もしかして俺のせいかなあ。んなあことねーよね。とりあえず滑り台のトンネルでひと眠りするか」

泉は一人でしゃべりながら、孤独とさみしさを紛らわしていた。

すると、その日の夜、おながが減って、なかなか寝つけないかった時、女の悲鳴みたいな声が聞こえたのでトンネルの隙間からびくつきながら覗いて見た。

「誰か、誰かー助けて、離して、はんし・・・んぐ」

「うるせー、ここはな無人の公園なんだよ。誰もこねーよ、騒いでも無駄だおとなしくしろ、殺すぞ」

どうやら、女が男に襲われているもようだ。泉はあっけにとられて様子を見ていた。

「た、一助け・・・きゃ」

「うるせー、わめくなっっていつてんだろ」

泉はだんだん、いてもたってもいられない気持ちになっていた。

「あー、くそ、くそ、あー」

頭の中でもじやもじやして、ついに吹っ切れた。

泉は草むらをこそこそ移動し、男の背後に忍び寄った。

「おとなしくしたら、気持ちよくしてやるからな」

「う・・・」

男はズボンを脱ぎかけているときに泉は背後から後頭部を殴った。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

泉は息遣いが荒くなっていた。

「あ、ありがとうございます」

女は目に涙を浮かべながら、震えていた。

泉はなんて言ったらいいか、分からなかったがとりあえず襲った男の服をさぐり、携帯と財布を取り出した。そして、警察に連絡し男を引き渡した。

そして次の日、泉はいつもどおり公園に寝ていた。

「あー、よく寝た。いやあ、昨日は大変だったけど、結果的にラッキーだったな。」

男の財布の中身に二〇〇〇円入っていたので腹いっぱい牛丼を食べた。

しかし、三日後

「しまった、金が亡くなった。くそう、ラストの一〇〇〇円でパチスロに行ったのがまずかった。もしかしたらと思ったのがいけなかった。あーくそ、死ぬ自分。くそ」

とりあえず、腹が減ったので公園の水を飲んで腹の足しにした。

「だぶだぶして気持ちわりい」

とりあえず、ベンチで寝転がることにした。

「あー、明日からどうしよう。まじでどうしようかな。俺生きてるかなあ」

一人で小言をいいながら明日のこと気にしていた。その時、泉の前に前に男に襲われた少女にあった。

「うん？」

「あ、あの、この前はありがとうございました」

「え、ああ。いいよ。別に、結果的に俺も助かったからな」

「も、も、もしかしたら、ここであ、会えるのかと思って、お、お礼がしたくて

、え、えと、あの」

女はパニくっていた。

「え、とりあえず、ここに座ったら」

泉はベンチをペしペしたいた。

「は、はい。失礼します」

女は緊張しているようだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

妙な間が二人を包んだ。オブラート見たく。

「「あ、あの」」

二人同時にかぶってしまった。シンクロ見たく。

「そちらからどうぞ」

泉は相手より先に言った。

「え、はい、えと、私の名前は幸子 川崎、幸子と申します。あの、お名前聞いてもよろしいですか」

「泉 泉佑樹」

「お、お仕事は何をしているんですか」

「・・・・・・・・何も」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人の合間にきまづい間ができてしまった。

「え、えとあの、ごめんなさい、お、お住まいはどこですか？」

「・・・・・・・・この公園です」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

またしても二人の合間にきまづい間ができてしまった。

あまりにも失礼なこと聞いて幸子の頭の中は恥ずかしさでしにそうなぐらい

真っ赤になっていた。

しかし、それ以上に泉は心の中で泣いていた。はやくこの場から立ち去りたいと、そして

力いっぱい泣きたいと。あと一言致命傷を言われたら、涙がとめどなく流れる瞬間であった。そのとき幸子が言った。

「あの、もしよかったら一緒に住みませんか」

「えっ」

泉はきよとんした顔で幸子を見た。

「え、えと、ごめんなさい、わ、私、何言っているんだろう、えと、私、最近、転勤でこの近くに、引っ越してきて、えと、あと……」

「いいの？本当にいいの」

泉は幸子の手を握りながら聞き返した。

「え、あ、はい。よろしければ」

こうして泉は幸子のマンションで暮らすことになった。

あれから2年も経つんだなあ。

泉はしみじみ思っていた。

「はあ、帰るの憂鬱だなあ……」

そう思いながらベンチで横たわっているといつのまにやら寝ていた。あたりはもう夕日も沈み、夜になっていた。

「う、うーん」

泉は頭の感触が柔らかく、ふかふかしていることに気が付き、目が覚めた。

「う、うん、え」

そう、頭の感触は幸子の膝枕であった。

「え、えと幸子」

泉は恥ずかしそうな顔をしていた。

「ご、ごめんな……」

幸子は指で泉の唇を防いだ。

「晩御飯できたよ。今日は佑樹の好きなハンバーグいっぱい作ったからね。はやく帰ろう」

泉の目に涙があふれていたが、幸子に気付かれないように手で拭いた。

「幸子」

「ん、なあに」

「ありがとう」

幸子は泉の手をぎゅっと握りしめて二人でマンションに帰って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9031h/>

ひも

2010年10月28日06時55分発行